

# 池の水抜いた何がいた？

## 都市部で「かいぼり」 外来種駆除

池の水を抜き、池底を天日干しする「かいぼり」。池干しとも呼ばれ、もともとは農業用ため池の設備の保全や泥の排出を目的に行われていた。最近、外来魚駆除など環境保護を目的として行われる例が、関東などの都市部で増えている。こうした「環境型」のかいぼりは、身近な自然を体験し、環境問題について考える場にもなっている。

今年2日、東京都立和田堀公園（杉並区）にある和田堀池で、かいぼりが始まった。60年ほど前に造成された人工池で、広さ約5200平方メートル。水深は約80センチで、底には落ち葉が大量に堆積している。アオコが発生するなど水質が悪化し、外来魚もいることから、都などの委託を受けた環境NPO法人「生態工房」が実施した。かいぼりが行われるのは池ができてから初めてだという。

種も1万匹を超えるモツゴやスジエビのほか、ギンブナやニホンイシガメなどが確認された。都の浚渫工事にあわせて天日干しし、来年春までに在来種だけを戻すという。

こうした「環境型」のかいぼりは、2014年に都立井の頭公園（三鷹市、武蔵野市）の井の頭池で行われた様子が報道されたことで盛んになってきた。生態工房の佐藤方博事務局長によると、都市の池で自治体や市民団体が実施する例が目立つ。今年はいぼり特集するテレビ番組が放映されて認知度が上がった。ボランティアを募集するとすぐ定員に達する人気だ。

一方で、捕獲した外来生物をまた池に戻したり、一過性で環境活動が続かなかつたりと「目的を見失った例も出てきている」と佐藤さん。「大人も子どももワクワクできる体験として根付くために、効果や目的を十分に考えてもらうことが大切だ」と話す。（竹野内崇宏）

「善福寺川を里川にカエル会」の渡辺博重さん(43)は、自分が遊んだ頃の池の透明度を取り戻したいと参加した。「子どもたちが体験できてよかった。愛着が生まれれば外来種の放流も減る。数年おきにかいぼりをしていきたい」と話す。

2日間の作業で見つかった外来種は少なくとも数千匹。在来種は少なくとも数千匹。在来種は少なくとも数千匹。在来種は少なくとも数千匹。

### エコ活の鍵

ランテニア募集などの情報が紹介されている。科学的な効果や意義を解説した「かいぼりがわかる本」の案内もある。

井の頭池では今年度中に3回目のかいぼりが実施される予定。近く情報を「井の頭恩賜公園100年実行委員会」のサイト（<http://inokashirapar.k100.com>）で公表する。

池は自治体や農業目的の水利組合などが管理しており、かいぼりには関係者の合意が必要だ。生態工房のサイト（<http://www.eco-works.gr.jp>）では、かいぼりの実施予定やボ



「かいぼり」で体長約1メートルの外来魚ソウギョが捕獲された＝東京都杉並区の都立和田堀公園の和田堀池